



おすすすめの一冊

斎藤 博 監訳

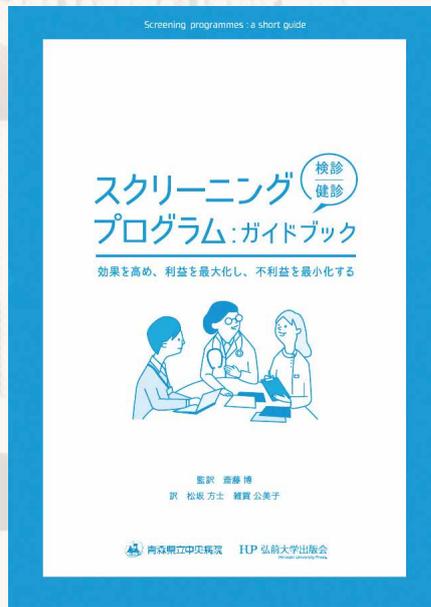
『スクリーニング（検診／健診）プログラム…ガイドブック』

私が推薦する本は「スクリーニング（検診／健診）プログラム…ガイドブック」です。

その理由は、①読み物としてかなり面白い②そういう仕組みかと腑に落ちる、そして③今の日本がどうなっているのか知りたくなる——の3つです。

医療系の人間は少なからず検査に携わっていますが、自分が行った／指示を出した検査が、ルチーンであればあるほど、それを受けた人間の人生にどんな影響を及ぼすかなど考えもしないことが大半です。ましてや、自分が行った検査がその人の人生を狂わせることがあるなど、夢にも考えていないかも知れません。でも、検査にはよくない面もあるのです。それは不利益と呼ばれます。

特に、病気の自覚や疑いのない「健康者」に対して行う「検診」や「健診」と呼んでいるスクリーニングは多くの人が受診するので、検査としては日常



スクリーニング（検診／健診）プログラム：ガイドブック
効果を高め、利益を最大化し、不利益を最小化する
斎藤 博 監訳 松坂 方士・雑賀 公美子 訳
弘前大学出版会*

診療でよく行われるものです。しかし、これは時として膨大な不利益を発生させることがあるのです。こう書くことと不利益とは「病気の見落としのことだろ」と思われる方がいると思います。それはごく一部で、もっともっと大きな不利益があるのです。それが何であるか知りたくありませんか？
第二次世界大戦直後の欧州でも病気を見つけて検査はいいことだと考え、

何でもかんでもスクリーニングする風潮がありました。現在の日本のような状況です。しかし、不利益への理解が深まり、スクリーニングには厳しい制限がかかるようになり、現在に至ります。一体、何があったのでしょうか？
本書は2020年に世界保健機関欧州地域事務局（WHO Europe）が出版した『Screening programmes: a short guide』の日本語版です。「効果

を高め、利益を最大化し、不利益を最小化する」という副題がついています。原版の豊富な図や写真をカラーで掲載し、さらに日本人に理解しやすいように世界的な基準とのギャップを埋めるための訳者補足がついており、読みやすく仕立てられています。本書は日本で初めて出版されたスクリーニングについての入門書の教科書に位置づけられます。

教科書ではありませんが、私は「スクリーニングで何が起きているのか？」の謎解きミステリーだと思って読みました。ぜひ手に取って、私たちの仕事の裏で人知れず起こっていることをのぞいてみてください。この本を読むと、提供する検査の意味を知って、最高の検査を、自信を持って提供する人間になりたくありません。

妥協のないコーヒーしか出さないバリスタは、こんな心意気なのかも知れません。

青木 大輔

あおき だいすけ

1982年慶應義塾大学医学部卒業、2005年から同大学教授（医学部産婦人科学）。2023年より赤坂山王メディカルセンター院長、国際医療福祉大学大学院教授、慶應義塾大学名誉教授。専門は婦人科腫瘍学。2013年度よりAMEDならびに厚生労働科学研究費補助金による子宮頸がん検診の有用性と運用に関する研究に研究代表者として従事している。

※本書は弘前大学出版会から出版されていますが、市販されていません。
<https://gankenshin.jp/products/screening-guidebook/> からPDFでダウンロードできます。